



ろうか？　ここまで考えてきてふと思ひ出したことがある。それは、たしか、都留重人氏が書いたものだったと思うが（どうも年をとると記憶がアイマイになっていけない、もし違っていたら間違いを指摘し誰が正しいか教えて欲しい）「蚊のいる国といない国」という文のことである。

内容を簡単に述べればこうである。昔、蚊のいる国といない国があった。どちらが人間にとって住みやすく良い国だろうか？もちろん蚊なんかいない国の方が良いに決まっている。・・・と思うだろう。ところが、蚊のいる国のほうは、蚊を防ぐために防虫剤やら蚊帳のような繊維、衣服を開発する。蚊取り線香やら防虫剤やら衣類やらほとんど開発されるための工場が建った。さらに、その工場に収める機械やらその部品メーカーもでき大きな産業のシステムが形成された。人々にとっては新しい雇用が生まれ所得を得ることができた。更には、雇用を求め人間が集まることによって商業や娯楽産業も生まれ社会が大きく変貌した。人々は車や家を買うことができ豊かな生活を営むことができた。一方、蚊のいない国のほうはどうだったろうか？こちらの方は、なんの産業も興らず依然として停滞した国のままであったと言う。人々は、静かではあるがなんの進歩もないままに過ぎていったという。もしかして、どこかの国から侵略されて衰亡していったかもしれない。

「第三の男」という有名な映画があったが、その中でオーソンウェルズ、扮する男がうそぶくシーンがある。戦争は多くの科学を進歩させた。「だが、スイスの三百年の平和はなにを生んだかね？　鳩時計だけではない

か」

戦争は我々人類にとって有害なものである。だが、ときとして、有害なものが、経済効果を生み出し人間の国家社会を発展させることがある。

蚊のいる国なのか、いない国なのか人間社会にとってどちらが幸福なのか私には分からない。この事実は人類が存在してこのかたずっと続いてきた課題であろう。だが、近代になつて資本主義の時代となりいつそう問題が深刻化してきた。特にケインズ思想が顕著である。資本主義社会の発展にかかせない有効需要は、その目的やソースが必ずしも有用なものでなくてもよい。大規模なダムを造ることが、本来に目的にかなつた効用のあることかどうか分からない。それでも、建設会社に利益をもたらし、雇用を造出する意味では有効なことがある。

蚊の話からずれてしまった。人間にとってはたしかに蚊は困った存在であろう。だが、この地球上には三千万種の生物がいるという。それらが、人間のもたらした開発行為によって生じた汚染が原因で絶滅の危機にあるともいう。これらの生物にとっては人間こそが他のものに比べとんでもない有害なものであるに違いない。蚊だって、経済的には有効需要をつくっているのである。少しくらい手足を刺されたって我慢しなければなるまい。

終わり

2010年10月